

# 飛耳長目

通巻177号 平成30年8月1日発行

## 芦田発生の御臨終に侍りて

重谷佐加枝

### 一 その前夜

私は先生とのご縁を辿る度、実に奇蹟を感じるの奇蹟に思えてならないのです。三日の朝法楽寺を去ります時、八、九の土・日は京都廣誠院で山崎益洲老師の提唱日でありますので、そちらへ参りたいと存じますので、それまで一夜泊りでお伺い致しますからと、共介様始め皆さまに申し上げます。お別れしていただくのでした。

家に帰りますと廣誠院から主人宛てに、廣瀬歌子刀自（廣誠院寄進者）危篤の報がありました。早速私は主人の代りにお見舞に参りまして堤唱の休会を知ったのです。

それで八日（土曜）授業を終ると、一路法楽寺に向いました。竹田駅までの定期券は持つていますが、福知山で降り、乗合自動車二十分の時間を利用して、町のあちこちを駆けずりまわりました。先生のお口に合うものを探し求めたのです。どこの店頭にも、先生のお口に合うらしい物を見出し得ないのでした。時間はなくなる、もどかしさにタルトとお寿司を布呂敷に忍ばせて先生の護へ急いだのでありました。室に入るまでに、看護のおばさんに経過をおききましたのでした。昼はよく眠られるが、夜休まれないで困ること、食欲の減ったことを聞かされたのでした。

御挨拶をしながら先生のお顔を拝しますに、何となくお淋しげに、前よりお顔もややほの白く、お痩せになっていられる。「はて、これで順調な御経過かしら」と一瞬不安を感じたのでありました。聞けば六、七両日は、東京に帰ると、二回も打電されました。果して東京に帰られる日が来るかしら……との不吉な予感に襲われたのであります。

私の参りましたことを、先生には非常に喜んで戴き「起してくれ」とおっしゃいますので、余田様と二人で静かにお起し申しました。お起し申しますと、先生は実にはつきりと

「重谷さん、あなたの子供（教え子）が天皇陛下をお迎え申したことを書いたあの文。誰に教えられたでもない、子供自身あつた気持ちを持ちや

んと持つている。素直に育てさえすれば、ああも素直に育つものか。」と現在の教育に対して憤慨方向に走るものか。」と現在の教育に対して憤慨なさいました。

それは、十一月十三日、天皇陛下を下山駅にお迎えたこと、十七日くらいに先生の御手許に着いた筈の、一年生全児童の作文に対して、先生がおっしゃったお言葉なのです。

この作文を先生が見て下さったか、どうかという事は、私には非常に気にかかることだったので、御病中の先生にお尋ねすることは、勿論出来ないう事でした。

しかし先生はもつれた舌の中から、それまで下さるのでもした。さては先生は見下さったのだという事は、たしかめたのですが、それ以上には話をすすめることは躊躇していたことなのでした。それに今日ははつきり、実にはつきりと、こ

うおつしやって下さったのです。

さて土産の品を差し上げましたが、タルトのほんの一端を口にせられただけでした。聞けば朝から湯さましのみで、一合の牛乳さえ、半分以上残してしまっていました。

しづらなくして又床に休まれました。身体のあちこちを、おさすりしながら、左足のむくみでいるのが気がかりでなりません。その中に便通の苦痛を訴え始められました。浣腸をなさった後なのでしたが、ほんの微量づつ（紙につくかつかない位）度々催され、きしる苦痛を訴えられるのでした。

お側に侍りながらも私の脳裏から離れぬこと、前沖垣先生から伺った先生の御遺言（六十才頃）のことでした。

**何時何処にて相果て候共御悔みあるまじく候。只側近二、三の友あり。道を語り給わば望外の幸いなり。**

これによって、先生が道を喜び給う極地を知らされたのであります。

今この御大患中とは申せ、最大の孝行は道を語ることに尽きると思ったのであります。

便の苦痛の去った合間々に、私は先生に次の様なことをお話し申したのであります。

かつて先生が「あなたの泣かされる子供（学童）



を急がれるのではありませんか」と申しますと、「そればかりではない、子や孫のところまで……とおっしゃったのには、思わず顔をそむけて暗涙にむせんだのであります。」

医師の回診をひたすらに待っていたのですが、午後二時過ぎ、急に息苦しく苦しまれ、苦しみの余り、頭に当てていた水枕を取って放られ、顔に玉のような汗をにじませられました。（この時が苦痛の頂点でした。）心臓喘息の発作のように思えました。静かに汗を拭ってお上げして脈に手を当てても、脈が弱くで分らないのです。急いで患者に連絡の電話をしたのでした。その内に、「おさまった」とおっしゃって、静かに眠られました。それが、二十分もすると又目を開けられました。そうしている中、四時十八分頃医師が見えました。脈をみられるなり、「これは大変です。もう東京へ帰えられてもよい位に快復していられるかと思つて、往診も一番最後にしていたのですが……」と、更に心臓を聴診されて「非常に心臓が弱つています。強心剤を注射しましょう」と言われ、さらに足の火傷の手当をして戴いたが殆んど全治してしまいました。足の浮腫について尋ねたのですが、どうも浮腫の方がむくむらしいのです。よい傾向ではないのですが、「通じのきしむのを苦しめられるのですが」というと、「左の下腹へ懐炉を入れて暖めてあげて下さい。薬の方も調節しましょう。」背中を腫瘍の手当を願つたのですが、「さきに注射をしましょう」と用意をされました。先生は「注射はすんだか」と、おっしゃるので「これからです」と申しますと、「早くしてもらつてくれ」と催促の様子を示されるのでした。右脚に二本の注射をせられて、背中の腫物を看て頂いたのですが「大したものではありません、今は何も用意していませんから明日手当することにしませう。」

その間予期した注射の効は何等現れず、益々息苦しさを増されるのでした。医師はまた二人を次の室に手招かれました。そして「今夜位より保たぬ。会わせる人があれば手配を」とのことであつたそうです。その間にも苦痛は刻々に加わつて、息苦しくなられるばかりでした。医師は又次の部屋に二人を手招かれ「三十分以内に迫つた。近くに会わせる人はいないか」とのこと

とでした。その慌しい空気に様子を悟られましたか、医師に對してはつきりと、「変化が来ますか」と問いた。だされたのであります。医師は無言のままです。私は先生の右側にびたつと寄りそつたままです。しつかりして下さい」と申上げたのであります。益々息切れはひどく苦しみます。出来るだけお楽なように、静かにお身体を左に傾け、右側から先生を抱きかかえる態勢をとりました。医師は「もうこれ以上注射をしても只病人を苦しめる丈のことですが、どうしても会われなければならぬ方でもあれば……」と言ひ、依田様も「もう致し方ありません。苦しめる丈のことなら、そのままです」と申されました。

先生はそれをも耳になさつたのでしよう。「更に注射をせよ」と身体のみぶりで示されました。私は耳もとに口をよせ、「注射をなさいますか」と申しますと、はつきり首肯されました。「御本人の御意志ですから、もう一回注射を……」、医師は素早く直接心臓に一本の注射を打込まれました。

しかし何の反応もありませんでした。静かに私の腕に抱かれて、右手をさしのべ、依田様に握らせられて約十分。医師は静かに静かに聴診器を宛て、もはや御最後であつたことを示されました。室には医師と依田様父子と私の四人。

あゝ先生はかくしてどこまでも教育を愛し、そのために最後まで生き抜く最善の努力を続けられたのであります。

**大法のまに安んじて自己の最善を尽す……**という先生の信條を、命にかけて示教せられ、遂に永遠不歸の客とはなられたのであります。

時に四時五十分、冬の日は間もなく暗を迎える寸前のことでありました。同夜は先生の側にお通夜し、ひたすらに東京からの共介様の御出でになるのをお待ち申したのであります。同時に先生御逝去の報を、側にありました葉書の数のあり丈を、心に浮ぶ方々から御報申上げたのであります。こうして御最後に侍つた私に、同志の方々から先ず尋ねられますことは、先生御臨終の際の御遺言のことでありました。しかし今ここに書きしるしました通り、先生は

最後まで死を御存知ありませんでした。否先生はまだまだ死にたくなかつたのでしよう。それは性という最も平凡な一大事実に直面されて、之を教育化なされようとしていられたこともあるのです。

「若しこれをまとめ上げたなら随意選題の比ではないよ、これが同志同行の基盤となる思想だよ」とのお言葉がありました。

同志同行の再刊、自伝の下巻というお仕事が残されていたのです。

尚何か御遺言をと私から先生に、求めるべきであつたでしょうが、あの場合そんな水臭い言葉を出し得るには、先生と私は余りにも人間的な連がりでありました。周囲の方から私を、先生の実際の娘かと誤まれるのでもありましたもの。

先生の御最後は紫雲も棚引かなければ、花も降らず、和平衛同行と同様ただ苦しいのみ。また沢庵禪師の臨終に將軍家の使者より御遺言を求められ、「死にともない」重さねに重ねて尋ねられて、「死にともない」先生もまた「死にともない」「変がきますか」の間は立派にこれを裏書きしていると思ひます。

それこそ立派に生死を超越悟境に達していられるのです。私が益洲老師の屋内で「眼光落地の時もさんか脱せん」の公案に老師の証を得たまゝを、先生は実際に体認された御最後であつたのであります。

悟道とはありのままそのままで何一物差加えることも、何一物取除くことも許されない絶対の現在を体認することでありましょうから。平凡の偉大化 偉大の平凡化。

### 三 先生と私

今を去る二十三年前、先生は愛媛県の国語視学官として、県下を普く行脚されたことがありました。その時私は県下の北宇和郡岩松校に先生をお迎えしたのであります。当時坐禪の修業を始めました私に、「あなたは坐つていなさるそうですなあ」とおっしゃって戴いたのでした。先生との結ばれは、この一語に尽きるのであります。先生は、翌年は私のつたない綴り方授業を御覧願つたのであります。

京都に住まいしてから二回、近隣の研究会に御

迷惑を御願いたしましたして、私宅にお宿をお願い致したのであります。先生が竹田に居を移されたとの報に接しました頃、私は、教育界を去って社会事業に生を求めんとし、御挨拶方々先生に御相談を申し上げたのであります。すると先生より折り返し封筒の表に「急」として戴いたお手紙は次の通りであります。

御状多謝。日本の教育界には年取った教育者の喜びというものを体験した人があります。あるにはありますけれども、私は知りません。教育者が真の喜びとするところは、かつて育てた子がどう育つか、世のためになんか働いてるか、それが教えるにもどれほど喜びであり、力であるか、親しく見るにもどれほど喜びであり、力であるか、知れませんが、教育界にも不文律に定年といつたようなものがあります。その頃になると、先生は年取ったような気持ちになり、中には老いぼれる人さえあります。私は生をこの世に享けた人として、心外至極のことに考えています。

重谷さん、八十間際の老人のいうことをそのままに聞いて、転職は決してなさるな。転職したその水臭い心に対して、これまでの教え子は全部離れてしまっています。その時にどれほど事情を説明しても、それは弁明にすぎません。その水臭さだけは何としても去りません。その水臭さ教育者は、我が子はお前たちに頼むよ。お前達の子供は精一杯に育てておくといふべきです。重谷さん、あなたも赤裸々に聞いて下さい。それから、私も赤裸々にお答えするのです。転職してはいけません。転職して今から幼稚園のような修業をはじめてはいけません。そんなことは、その筋から学校をやめて下さいといわれてから、ひまつぶしにはじめてもよいことです。

重谷さん、決して職を去ってはいけません。凡俗根性を出してはいけません。方丈様によろしく。(二六、二、五) 次は先生は私の組を実際に教えようとおっしゃって下さったのでした。そうして校長様宛てに山崎校長様。こうして突如手紙を差上げます非礼を御許し下さい。重谷さんが何かと御保護御指

導を戴かれますことを心から感謝致します。重谷さんを愛媛の岩松で知りましたのは、二十年前余も以前でしよう。以来二、三回お目にかかった程の交際。しかし教育者として顧み甲斐のある人だとは思っていません。この程他に転職しようというお言葉が手紙のはしにちらと見えまして、私は率直に教育者は教育に死すべきです。何を血迷ったとをいいますかと申しました。すると教育者としての死に方を教えよということでした。よろしい数えましようといつたのが、この度のことを生んで校長様始め諸先生にまで、御迷惑をかけるようなことになりました。こうして行事がわきから割込みますのは、どれ程御迷惑だか知れませんが、私も高師生生活中にこうしてを経験してよりました。重谷さんの今後は生きるか死ぬかか問題です。この義に於てこの度のこと特に御許容願ひ上げます。

学年末も迫った三月十六日、十三里も離れた高原までわざわざ私のために御出で下さったのであります。お帰りがけ新学年になって学級担任が決まりました。教科書を持って教材研究に法楽寺へ来るようにとのお言葉でした。そこで四月三日、新一年の「こくご」を持って法楽寺へ参りました。すると、先生には教科書を開けようともなさらず、「教科書を使わないで行け。高原の土地の物に教材を求めよ。生きた教材で指導せよ。土に芽生える教育をせよ。子供の身辺に教材を求めよう。……」との御指導でありました。前代未到の境とはこのこととごさいました。か。実に血みどろな苦闘をつづけました。この記録をそれ以来ずっと、先生にお目を通して載せておりました。

先生は非常に喜んで下さいました。日本に誰も持たぬ研究物を持つとまでおっしゃって下さった。その最終の御講演、国語教育の大道中の「教材について」を実際に行したものです。先生の入学当初の国語教育に対する貴校の到達点を示すものであろうかと思ひます。御病中、先生と私と二人丈になりますと、先生は私の手をしっかりと握りしめられるのでした。

二人の温みを通したまま、静かにその手を私の胸に押しあてられるのであります。若し私に禅の体験がなかったら、私はそれをも淫らなこととして、すげなく斥けたことでありましょう。平凡の偉大化を体認した絶対の立場から、私は凡てを是認したのであります。私は静かに先生の手を、私の乳房に導いたのであります。

如何に先生が満足あそばされましたか。後には人前でもくり返されるのであります。私は「先生は赤ちゃんみたいですね」とその場を茶化しつつ、先生の意を満足させましたのであります。この点で私が先生の御最後をおみとり申し上げましたことは、実に絶対の意義があったかとも思うのであります。以上長々と書き綴りました。せめて膳写物にしてでも同志の皆様にお伝えしなければと責めを感じておりましたが、この度森信三先生の御厚意によりまして、尊い紙面を拝借して、その責め的一端を果し得ましたことを厚く御礼申上げ筆をおきます。(了) (「開頭」昭和27年6月号通巻第59号)

あとがきに替えて

このような手記は滅多にあるものではないだろう。森信三先生が注目されたのもうなずける。何せ芦田先生は20歳余も年長のお方、しかも国語教育界の泰斗。「修身教授録」を認められ、全五巻を出版してくださったお人、そのお方のご臨終の記録なのだ。「死」は森信三先生にも最も重要な懸案の心事であった。しかも同志の重谷姉の手記。これに注目しない訳なし。森信三先生は芦田先生の葬儀全般を担い、ご遺骨を抱いて法楽寺へ戻られたのだ。愚生も一読して大変興味深いものあり。世に「終活」の記事があふれるが、精神的なものにしていくばくがあるか。(30日二纂)

〒633-0003 桜井市朝倉台東2-538-89 電話0744-4513422 Email: hji3@ken.jp http://web1.ken.jp/syushn